

敗戦の悲劇から脱出して

宮城県 畠山吉郎

私は満州事変に満州間島に出征、一年半の戦時勤務が解かれてから、昭和八年十月外務省巡查を拝命して間島総領事館に配属され、昭和十二年四月、治外法権の撤去に伴って、満州国警察に転官、昭和十四年四月、間島省警務庁分室に配属替えとなった。

昭和十七年四月、満州国警務総局分室第四科に転勤する。分室は満州国警察の特殊な機構であったから、職員は日系人で編成され、その任務はソ連の情報収集にあたる秘密の組織であった。

大東亜戦の戦局は日本軍の戦況は不利となり、加えてソ連参戦も時間の問題となつて、やがて満州も戦場となる可能性をほらみ、緊迫した情勢となつたので、満州国政府は関東軍は連係をとつて、政府機関を通信に移転する計画が進められ、八月十四日、警務総局に

おいては家族を朝鮮に疎開させるため、新京神社に集結して、男子職員全員で貨車からの荷降ろし作業にあつた。夕方をむかえ、戦局に変化の情報が伝えられたので、午後十一時解散してそれぞれ家族と共に我が家に戻つた。

翌十五日、全員戦場に出て、正午の重大放送を聞いたのである。各科にセットされたラジオの前に集まつて、あるいは弱く途切れ、途切れて流れてくる終戦の詔勅は大東亜戦の終戦宣言であることを知つた。私は午後四時、命令を受け、外交部次長（日系）に随行して、ハルビン総領事館員二十五人が朝鮮京城に行く途中、新京駅で一行に終戦を伝えて、ハルビンに引き返させたのであつた。

翌十六日から私の取扱つたソ連関係の極秘書類の焼却に取りかかつて三日間続けてやつと終ることができた。当時、日本人の間にソ連兵に関する不安が流言となつて広まつた。

八月十八日夕刻、ソ連軍の第一陣が新京に到着した。不安と緊張が高まりながら遠巻きに彼等の動向を見ま

もりながら約十日間が経過した。夕方私にソ連秘密警察の行動が開始されたと友達から第一報が届いた。検査の目標は警察官・憲兵・分室職員であることが判った。いよいよよくなるべきものがきたと思つて、外出することを避け、情況の把握に努めた。

たまたま九月初め、午前九時頃、ソ連秘密警察が朝鮮人通訳を伴つて突然我が家に来訪、私に対して氏名、年齢、身分等について執拗な尋問を続けること約二十分に及んだ。

私は北安省から避難してきた開拓農民であることを繰り返して主張して納得されたのか、しぶしぶと引揚げた。更に彼等は、元警察官・軍人・一般日本人等と検査の幅を広げ逮捕、取調べを強行して釈放の条件として、上司、同僚を密告することを約束させていた。

私の身辺に、いつか、又、捜査のほこ先が向けられることも考えたので、二十一年二月ソ連軍撤退するまで、親友寒ヶ江君他数人の友人宅に転々と身を寄せ、御世話を戴きながら、彼等の捜査目標から逃れることができたのである。

又ソ連兵が立哨中、通行中の日本人を呼びとめ、身体検査をやつて金銭、時計を取り上げる行為が続いたのである。一人で何個も腕にかけて得意そうにしていた。

夜間ジープを運転して日本人住宅に乗りつけて軍靴のまま、部屋に侵入して、衣類、金品、装身具等のめぼしい物を強奪する行為が公然と実行された。ソ連軍に代つて中共軍が進駐してから、私は友人のすすめで古着の収集販売を始めた。ある日、店頭で若干の古着を陳列したところへ中国人(男子)が店頭に現れて、陳列してあつた長靴と帯皮に視線をやつて、「お前は警察官か軍人、いずれかであろう。警察に連絡して没収するぞ」と荒っぽい語調で高飛車な態度に出たから、あらかじめ動作が読みとれたので、長靴と帯皮を彼に与えてことなくすませたこともある。ソ連兵も中国人も、日本人の持物に関しては異常な関心を寄せたのが当時の実情でもあつた。

二十一年六月頃、日本人の間に引揚げについての情報が話題となつて半信半疑のうちに八月を迎えた。あ

る日、日本人居留民団本部から引揚げの日時携行品等の確報が示された。八月六日六時出発であったから、指示された内容によって、一人千円、着替えの衣類と食糧二日分をリュックに詰めて、予定のとおり新京駅を出発、一路南下、錦州収容所に午後六時到着するこ
とができた。

八月二十四日、コロ島に日の丸の旗をなびかせ待機していた引揚船リバティー号に二千五百人の引揚者が乗船。ドラの音と共に出航やつと追われる立場から解放されて祖国の土を踏める喜びで一杯であった。

満州生活の辛苦

山形県 後藤 栄吉

私は、戦後引揚げてから四十有余年、若き日に体験した苦汁の断片を書きのこし、子供達には勿論、孫達にまで、祖父である私を理解するために、また戦争防止と平和の一助にしたいと思い執筆した。

昭和十五年頃から統制経済が厳しくなつて、私が職人見習いとして働いていた菓子製造業の商店は原材料不足から商売は貧窮に落ち込んだので、二十一歳だった私はこのままでは将来のことを思い焦り悩んでいた。

そんな或日、満州大陸に義勇軍として出発する人々を駅に見送ったことがあり、その時でした、よし、私も何とかして大陸に行こうと決心したのであった。

しかし、商店の主人も、兄も姉も反対であったが、唯、天童の親戚野川家だけは理解を示してくれたので、四面楚歌の中に一筋の光を見出して有難かった。

その年の十二月、又従兄弟の喜五郎さんが満州にいたので、私から希望を打ち明けていた返事に、直ぐ来い心配無し、と嬉しい便りである。兄と姉を説得して許しを得たので、早速、店から暇をとりました。

愈々、昭和一六年二月二十四日出発、母の作つてくれた握り飯、紙製のトランクにタオル二本、足袋三足、日記帳一冊、襦袢二枚、金三十円、これが私の全財産でした。